

# 南方（ニューギニア）

## ニューギニア最前線

兵庫県 田中英雄

海上機動第二旅団編成集結。第一次渾作戦。

この旅団は、満州の公主嶺（二面坡）で編成業務を十九年三月三十一日完了した敵運、精銳にてっし、各部隊から抽出された。

その内容は、第一独立守備隊所屬の第八（敦化）、第九（明月溝）の両大隊、第二十七大隊（二面坡）第二十九大隊（ハルバン香坊）第三十大隊（ハルビン）の歩兵を基幹として、その他戦車隊、高射機関砲隊をはじめ各地の特科部隊多数で占められていた。

なお頼もしくも大半が現役バリバリであった。しかし輸送隊はどうしたことか集結のとき参加していなかった。これは、関東軍は船を必要としない部隊だから船艇を主とする輸送連隊は後日どこかで合流して来るだろうと予想された。海上機動旅団という名称の部隊に転属させられた一同は、「海上、海上」と呼ばれた。「まさか、俺たちは海軍に編成替えされたわけでもあるまいが」、ともかく、今までで陸軍部隊で聞いたことのない海軍みたいな変な名前の部隊だと首をかしげた。

海上機動隊第二旅団（巡三一八一）は昭和十八年十二月発令をもって関東軍の公主嶺で編成された。旅団司令部には第二十九師団の歩兵団司令部を充当させた。補充留守業務の管理は久留米師団と定めたが、じこの経過上補充は実施しえなかった。

旅団司令部は九十四人、水陸両用自動車九両で、機動隊第一、第三大隊は各大隊とも本部(百三人)、三個歩兵中隊(各百九十七人)、一個追撃中隊(百五十五人)、一個砲兵中隊(百一十一人)、一個作業小隊(六十八人)で人員計千三十六人、合計三千百八人。

装備は各大隊とも重擲弾筒三十七、軽機関銃三十六、重機関銃六、曲射(九七式)歩兵砲二十一、軽迫撃砲三、速射砲(三七ミリ)二、山砲(四一式)三。

旅団機関砲隊は七十六人、高射機関砲六。旅団戦車隊は六十六人、軽戦車九。旅団工兵隊は四個小隊と一器材分隊、二百四十三人。旅団通信隊は二個小隊百三十九人。旅団輸送隊は本部五十四人、輸送中隊四個(各三十五人)、護衛中隊一個(百六十四人)、材料廠一個(六十四人)。装備は特大艇十、大発百五十、駆逐艇十、SS艇三人。旅団衛生隊は二個担架小隊、一個医療班、計百九十人。

四月早々、一同が大連港で「青葉山丸」(三井船舶・一万九百十五重屯貨物船)に乗船する前、前記の独立守備隊を主として各地の部隊から、旅順の白蘭子(二百三高地の近く)に將兵がぞくぞく集合した。

一万屯級貨物船といえば、当時では超弩級である。この海上機動第二旅団こそは、大本営が最装備させ、最重点地区に指向させ、敵占領地に、きりもみ逆上陸させる時の「トラの子」旅団の第一旅団に次ぐ第二弾だった。

旅団長玉田美郎少将はここで、整然とした軍装で壇上にたち、「わが海上機動第二旅団は、敵前きりもみ逆上陸を使命とす」。かくして大本営陸軍部から多人に期待された海上機動隊第二旅団の將兵約三千百人と各種一般兵器、重火器、弾薬、糧秣を満載した巨大な「青葉山丸」は昭和十九年四月十二日夜乗船、將兵は行先は知らされず、いずこともなく、大連港をあとに海面をぶっとばした。

この船は時速十八ノットの当時の高速船である。陸岸(朝鮮)を左方に沖合を南下し、一夜あけて十四日には、はや関門海峡に突入し、門司の彦島沖に錨をいれた。門司はちょうど桜花爛漫の春だった。乗船將兵はせめて一度だけでも肉親の顔をと、しみじみ回想していた。

十九日夕刻、「青葉山丸」を含めて十三隻の輸送船と二隻の海軍小型護衛艦が一斉に関門海峡をあとに船出し

た。このころはもはや関門海峡をあとに出れば、いつ敵潜の魚雷がふっとんできるかしかない。船上に誰が口火を切るともなく、軍歌の大合唱が声高らかに流れた。

「あーあ、堂々の輸送船」。こうして船団は敵潜を避けて支那海岸沖合を南下して行った。「青葉山丸」の将兵たちは、大連で寒さにふるえながら夏服に着替えさせられていたから、南方行きだけはわかっていたが、それがどこか、いっさい知らされず、また知らなかった。

船は南へ南へと進み、四月二十九日台湾の高雄港に到着した。そしてやっと五月四日にマニラ湾に着いた。船は五月五日午後マニラ湾港をあとにした。

これから大変だ。敵潜水艦がひそみ待ちかまえている魔のスール海だ。突然、誰かが「雷跡」。左舷、至近距離、とりかじ・おもかじの余裕もなく、一瞬後「ドッカン、スー」「やられた」高さ四メートルぐらゐの水柱。大穴から海水が流れいり船首はただちに沈下し始め、船首海面へ、「沈没か」。即座に北井少佐は怒号した、「甲板上の重量物、兵員みな船尾へ」、作業に突貫した。不思議に沈下が止まり海面すれすれのところで水平となった。「しめ

た大丈夫だ」。これの雷撃で九人の将兵の行方不明者が出た。明けて五月九日、ヨタヨタの沈没寸前の船は南の島の美しい小港「ザンボアン」についた。ホット一息、三途の川から舞い戻った感懐だ。だが上陸早々に「この地に米軍ゲリラ部隊多し、出撃、撃滅せよ」、旅団長の発令。「何だ、たかがゲリラか」きたえにきたえたこの腕で一撃のもと全滅させた。

やれやれと近くの小川でいのちと分厚いあかの洗濯であった。その時、突如緊急命令で海上機動第二旅団に白羽の矢が立った。かくしてニューギニア「ビアク」は日米両軍精鋭の正面衝突へと爆発していった。

「明三十日夕刻までに、ザンボアンガ港に、全員乗船準備を完了せよ」。ゲリラ討伐参加全軍はなにがなにやらわからず昼夜ぶっ通しで大汗かいて突っ走り、三十日夕刻ギリギリ、ザンボアンガ港に帰還した。旅団の第一陣約二千人弱が先発となり、夕刻棧橋におもむくと、迎えてきていた船は輸送船でなくピカピカ黒光りする堂々たる巨大な軍艦二隻だった。「重巡・青葉」七千百屯と「軽巡・鬼怒」五千百七十屯である。

陸軍兵は「一時間以内に乗船完了せよ」。二隻の巨艦は二十時ザンボアンガ港をたった。

外海に出るや船首甲板に波を乗っけるばかり三十ノット以上の猛速で一直線にぶっとばし、陸兵たちは目まいと船酔いを繰り返した。かくして翌二日いよいよ敵機動部隊と戦闘にはいる。第一次渾作戦である。

## 戦争とは

神奈川県 斎藤 芳郎

「あったよ あったじゃないか」

それは、私たち通信隊員数人が、高さ十メートルほどある崖を必死の思いで登り切り、森林のはしにはいりて攻撃目標の「ワウ市」及び飛行場を数キロ前方に望見出来た時の喜びの叫びであった。昭和十八年一月二十七日正午のことである。

その時、私たちはすでに食糧もつきはてていたうえ、睡眠不足で「死んだ方が楽ではなかるうか」と思うほど

疲労こんぱいしていた。けさから敵機の銃撃により部隊行動ができないため、数人ずつ分散し、散在している竹藪などに身をひそめつつ前進していたので、岡部支隊もバラバラになってしまい、支隊長の岡部閣下すら見失ってしまっていた。

眼の前に見えるワウ市及び飛行場は南国特有の太陽に輝き、先ほどまで銃撃していた敵機や、間断なく離着陸していた輸送機も消えうせ、牧場の牛がのんびりしている平和境そのものであった。

げんなりしてしまった私たちは「早くワウを占領し、食糧をさがしだそうや、今晚の不寝番は一人にしようぜ」などとブツブツいいながらワウ市にのびている砂利道を前進して行った。

それは去る一月七日、敵機の空爆下「ニューギニヤ」の「ラエ」に上陸し、じらい、磁石をたよりに二週間分の食糧をけいこうしたのみで、ジャングルをはいまわり、ワウ市及び飛行場の攻撃に向かった時であった。攻撃の主力は水戸の百一連隊で岡部少将を長とする岡部支隊であった。